

力のつく日記指導のあり方に関する考察

—進級制度を通して—

神奈川県川崎市立富士見台小学校 土居正博

はじめに

日記指導は多くの教室で取り入れられている。私も子どもたちに日記を書かせてきた。しかし、イマイチ子どもたちの力を伸ばせているという実感がなく、子どもたち自身も「ただ書かされている」という雰囲気が漂っていた。そこで、昨年度、「意識的」に「日記指導」実践を積み重ねてみた。本稿はその実践をまとめたものである。

1 問題の所在

日記を宿題にして、子どもたちに書かせてはいたのだが、イマイチ子どもが乗ってこない。そして年間を通して子どもに「力をつけられた」という実感が私の中になく、実際子どもたちの力も伸びてはいなかったようである。結局日記が、「私と子どもとのコミュニケーション」のための「ツール」としての役割しか果たしていなかったように思う。

私のこれまでの日記指導の最大の問題点は何か考察してみた。それは、「このような力（姿）を身につけさせたい」というような「具体的な評価基準」を設けていなかったことである。「具体的な評価基準」をもつということは「指導」をする「第一歩」である。そのため、今回の日記指導に関しても、その「第一歩」に立ち返り、「日記指導でどのような力をつけたいのか」を明らかにすることから始めた。

2 日記指導で育みたい力

日記指導で育てたい力は、言うまでもなく「書く力」である。しかし「書く力」といってもさまざまな力がある。その中で私は「取材力」だと考える。これは、「書きたいこと」を自分で見つけた、選んだりする力である。ある同じ経験を二人の子どもがしたとしても、「取材力」がある子は、そのことを深く考えたり、面白い点を見出したりして文章を書くことができる。一方そうでない子は「今日、〇〇をしました。楽しかったです」といった具合に機械的な文章になってしまう。この違いを生むのが「書きたいことを見つける力（取材力）」だと思う。1つのことからたくさんのことを感じ取る「感受性」といったものとも言える。

このような力は、人生を豊かにする。デューイは「教育とは経験の意味を増加させ、その後の経験の進路を方向づける能力を高めるように経験を改造ないし、再組織することである」と述べているが、その通りであり、「経験を再構成し価値づける」ことができる人間はたくましく生きていけると思う。大学時代さまざまな友人が「経験」を求め海外留学していったが、得てきた「経験」にふさわしい力（人間性、考え方）をつけて帰ってくる友人もいれば、そうでない友人もたくさんいた。両者の違いは、「経験を再構成する力」の差だと私は考えていた。この力が高ければ他の人と同じ経験をしたとしても、その結果つく力が違ってくるというのが持論である。

日記指導において、ここまで考えるのは、少

し大げさかもしれないが、「書きたいことを見つける力（取材力）」はデューイの言う「経験を再構成する力」につながる、非常に重要な力であると考えている。

3 力を育むための手立て ～進級制度で「詳しく書かせる」！～

昨年度は一年生を担当した。そのため、いきなり「書きたいことを見つけろ」と言ってもまずできない。まずは、「1つのことを詳しく書く」ということから始めた。「1つのことを詳しく書く」ようにすると、そのときの場所や言葉、状況などを詳細に思い出さなくてはならない。この作業をくり返していくうちに「取材力」が育ち、「自分なりに書きたいことを見つける」ことができるのではと考えた。そこで、以下のように「進級制度」を設けた。

- 3級：150文字程度のマス目。マスに大きく、濃くきれいに書くことができれば合格して2級にいける。
- 2級：200文字程度のマス目。3級基準に加え、「題名のつけられるもの」を書くことができれば合格して1級にいける。
- 1級：250文字程度のマス目。2、3級基準に加え、「自分だけの気づき」を書くことができれば合格して原稿用紙へ。
- 原稿用紙：400文字。今までの級の基準を意識して書く。

3級の合格基準は、「形式的事項」である。文字を最初に学習する一年生として、「これだけはクリアしておかなければいけない」という点である。まずは単調な文章でよいから、濃く、きれいに書けることを第一段階とした。

2級の合格基準は、「内容的事項」である。ここを最も重要視した。「題名のつけられるもの」とは、「1つのことを詳しく書く」ための手立てである。例えば、「今日、朝起きました。その後朝ごはんを食べました。おいしかったです。その後学校に行きました。勉強が楽しかったです。その後帰って、公園で遊びました。楽しかったです。そして、家に帰りました。ご飯を食べて

お風呂に入って寝ました」というような「出来事を羅列した」日記には「題名」をつけることができない。このような日記よりも、「1つのことを詳しく書く」ために、「題名をつけられるように」と基準を設けた。

また、一年生には、「題名」と言ってもイマイチピンと来ない子もいるので、子どもの日記を紹介する際、読み聞かせた後に「題名をつけるとしたら何がいいかな」などと子どもたちに聞き、「題名」に関して意識させる場面を増やした。

1級の合格基準は、「1つのことを詳しく書く」ようになった後、「自分だけの気づき」を書けるようになることである。「自分だけの気づき」と言っても、大したことでもなくてもよい。後に挙げるが、「友達の優しいところ」「お母さんのありがたさ」「お父さんの優しさ」「虫さされの後両腕を比べてみた」などである。それでも、これらは読んでいて非常に面白いものである。

最後に、1級に合格すると、原稿用紙に書けるようになる。

4 子どもの様子

1 子どもたち全体の様子

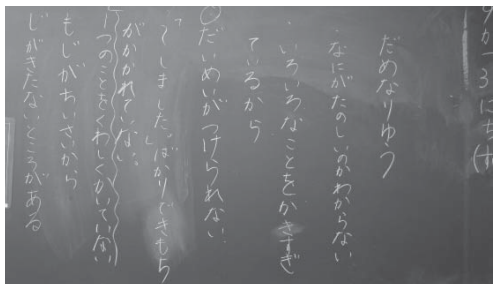
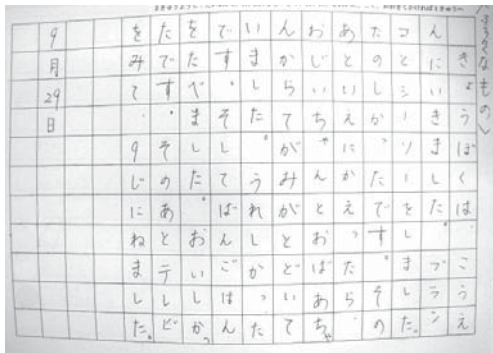
子どもたちは、進級制度で合格しようと日記に積極的に取り組むようになった。とくに、3級の「字の基準」は目に見えてよくなった。しかし、2級に合格するのがどうしても難しい子が出てきた。そのような子たちにはくり返し指導していき、2級に合格させられるよう試みた。後に詳述したい。

また、子どもたちが書いた日記を紹介する時間をとても楽しみにするようになった。

2 2級の「壁」を越えるために

一年生にとっては「1つのことを詳しく書く」というのが非常に難しかった。

そのために全体指導としては、「題名をつけられるもの」を合言葉にし、それがどのようなものなのかくり返し子どもの日記を紹介した。



そして、どのように詳しく書くかを話し合った。
吉永幸司著書^{*}を参考に、「いつ・どこ・なぜ・
どのように・だれと」を書くことと詳しく書けるこ
とを指導した。また、上の写真のような、教師
が書いた日記と子どもが書いた2級合格の日記
とを「比較」させ、教師の日記の「よくないこ
ろ」を挙げさせるなどして、質の高まりを図
った。

個人指導としては、先に挙げた「出来事を羅列した日記」を書いてくる子どもには、ある部分に線を引き、「ここをもっと知りたいなあ」とか「このことで1枚書くといいよ!」などとコメントを書いた。また、「このできごとの中で一番楽しかったのはなんですか。そのことをくわしく書いてみよう」などというコメントも書いた。そして、返却するときに具体的に指導した。「いつ・どこ・なぜ・どのように・だれと」をつけ加えて詳しく書くことを指導した。

年度終わりには、全員が2級に合格した。クラスの大半が原稿用紙までたどりつくことができた。

3 個人の成長

～HとDの成長～

ここからは、個人の成長を、実物の日記を通

して紹介したい。

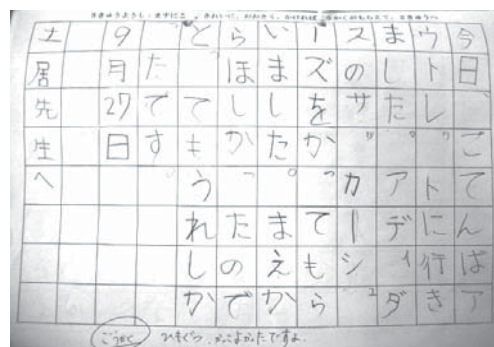
日は、活発な男の子である、しかし、学習はあまり得意なほうではなかった。しかし、日記を書くことはがんばっていた。「今日も宿題日記だ！ やった！」などと口にし、やる気を出して取り組んでいた。

3級不合格



「進級制度」を取り入れ、約1か月で下のよう
にきれいに、濃く書けるようになった。

3級合格



以下が、2級合格のものと1級合格のものである。

2級合格



▲習っている「剣道」について詳しく書いている

1 級合格

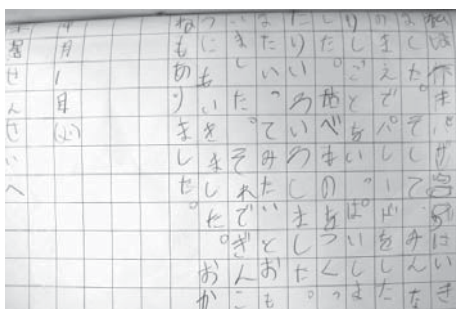


▲お父さんの優しさに気づいている

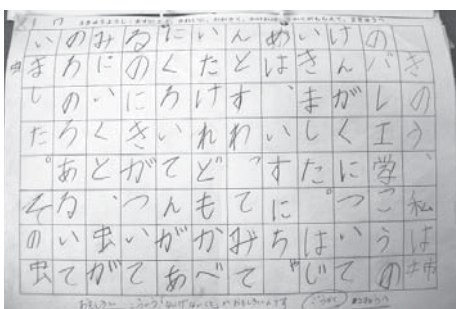
まず、書く字が格段にきれいになった。字の指導とあいまって、「日記で進級したい」という気持ちから、丁寧に書くようになった。また、書く内容も、2級合格のものと見るとわかるように、非常に詳しくなっている。漢字を書くことにも挑戦し、「こんなに難しい漢字知っているの?」と聞くと、「ママに教えてもらった」と得意げな顔だった。漢字に関してもどんどん詳しくなっていた。

Dは、もともと賢い子であったが、雑に文字を書いてしまうところがあった。しかし、進級制度を取り入れてからは、丁寧に書くようになった。

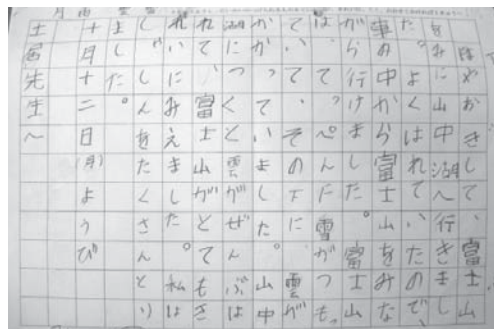
3 級不合格



3 級合格



2 級合格



1 級合格



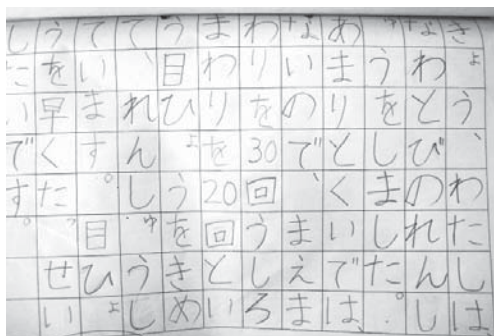
2級合格の日記では、山中湖へ行ったことを詳しく書いている。1級合格のものでは、注射を打った腕と打っていない腕を「比較し」、太くなっていることに気づいている。何気ない日々のことだが、「比べる」という思考を使って、気づいたことを書いている。



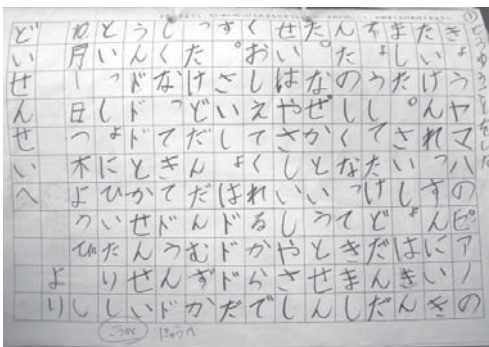
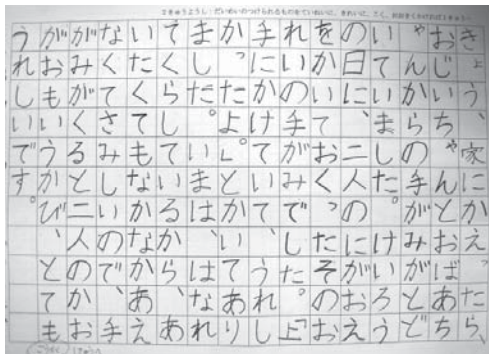
4 その他の子どもの日記

その他の子どもの日記も以下に示す。

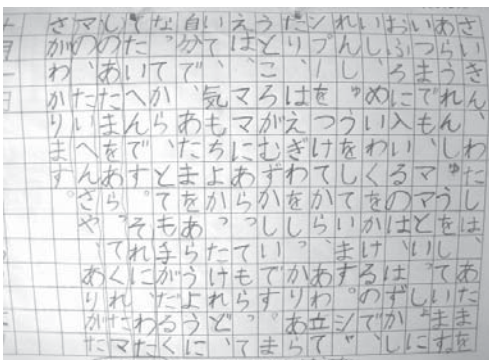
3 級合格



2級合格の例



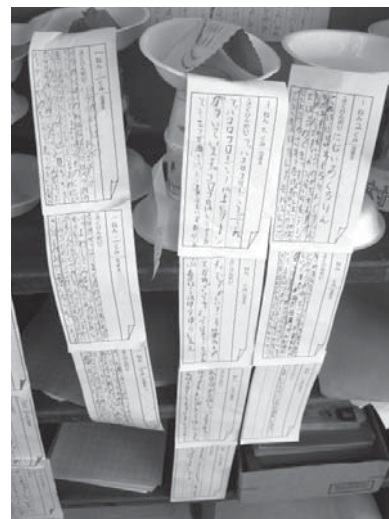
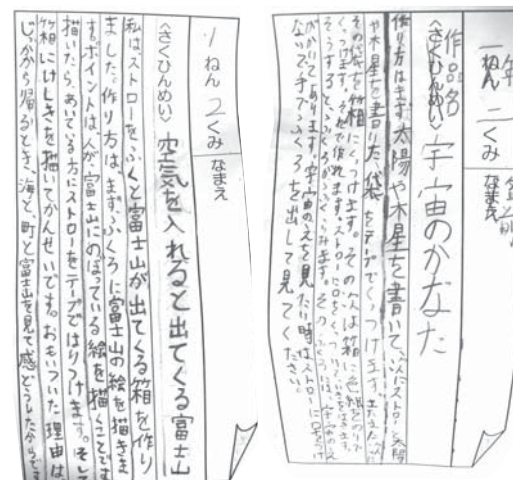
1級合格の例



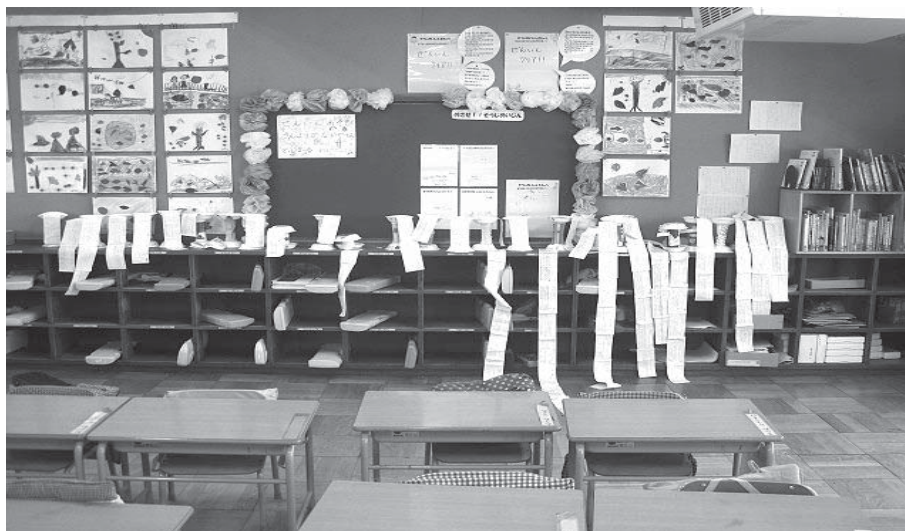
5 書きまくる！子どもの姿

このような基準のもと、明確なねらいをもって日記を書かせることで、子どもたちに「書く力」や「取材力」をつけることができた。

すると、「1つのことを詳しく書けるようになった」子どもは、国語科だけでなく、他の授業でも、詳しく書けるようになっていった。例えば、以下に示す、図工の作品カードである。



規定の3列の罫線では足らず、より小さな文字で字を敷き詰めている。1枚で足りない子は何枚も書き足している。休み時間まで使って書いていた。作り方や想像したこと、遊び方などを詳しく書いている。このような子が増え、教室は次ページのような姿になった。



◀ 作品カードを伸ばす子ども



ここまで長いと、「くり返し同じことを書いているのでは?」と内心疑ってしまった。そこでために、1人の子どもの作品カードを無作為にピックアップし、パソコンで打ち出すと次のような文章だった。

一年二組 OO OOO

「たまごからひよこがでた!!」

わたしは、ひよこがたまごからうまれたえをふくろにかきました。えはちやいろい木でつくったとりのすの上にたまごのえをかいてそのつぎにまた、とりのすのうえにこんどはひびが入ったたまごのえをかいて、そのつぎにひよこのえをかいてその上ににわとりのえをかきました。

一ばん上はあおぞらとお日さまをかきました。ひよこにわとりと下にかいたえはぜんぶきょうかしよにのっているえをかきました。はこのそとがわやよこにも水いろのおりがみをはってまえだけにまたあおぞらとさっきとちがってくもとにわとりのえをかきました。きにっているえは、とくににわとりとひよこです。

たいへんだったところは、ストローとふくろの口をテープでつなぎあわせるところです。つくりかたははことおりがみとテープとふくろといういろないろのマジックペンをよういして、はこのよこの上か下にあなをあけて、ストローをさします。そのときにジュースとかをのむときに口をつけるほうを中がわに入れて、いつもジュースをのむときに口につけないほうをあなをあけたところのほうのむきにさします。それでストローがうごかないようにテープでとめます。つぎにふくろにえをかきます。えはなんでもいれいす。そのときにはこのあ

なからでたストローにふくろをさきにつけてからえをかいだほうがいいです。わたしはそうしなかったから、すこしかえが見えなくなっちゃいました。えがかきおわったら、はこのまわりになにかへんなえがかいてあるといけなから、おりがみをまわりにテープではります。はりおわったらかんせいです。

あそびかたは、ふくろにくうきが入らないようにして、ストローに口をつけて、ふーっとくうきを入れてあそびます。つくるときは、けっこうかんたんだとおもっていたけど、やってみたら、けっこうむずかしかったです。しっばいしちやったところは、えが見えなくなっちゃったところですよ。ストローを入れるあながあいているよこのぶぶんには、水いろのおりがみははりませんでした。あと、はこの下のぶぶんはまた、おなじように水いろのおりがみはりませんでした。にわとりとかひよことかのえはきょうかしよのえを見てかいだのでけっこうかんたんでした。みんなもつくってみてくださいね。

意外と「くり返し」は少なかった。継ぎ足す紙を渡す際、「今どんなこと書いているの？」などと聞くと、内容の点検になり、くり返しを防いでいた。

ともあれ、日記指導で鍛えた力がこのように図工でも生かされていた。

おわりに

いつも取り組んでいた日記指導を変えたいと思って今回の実践に取り組んだ。「詳しく書く」という書き方を一年生のうちに習得できた子どもたち。それによって「量」を書けるようにな

ってきたので、これから二年、三年と進んでいくにつれて、構成など「質」も考えていかなくってはならない。しかし、「量」を書ける子は必ず「質」も高まっていくと考える。子どもたちの今後の一助になる実践になっていれば幸いである。

【参考文献・引用文献】

『民主主義と教育（上）』ジョン・デューイ著 松野安男訳（1975年） 岩波文庫 p127

『「書くこと」で育つ学習力・人間力』吉永幸司著（2002年） 明治図書

『吉永幸司の国語指導入門』*吉永幸司著（2014年） 小学館 p83



受賞のことば

土居正博

まさか前回に引き続き今回も賞を頂けるとは夢にも思っておらず、「自分の力量を少しでも高めるために」との思いで実践をふり返し、まとめたのが今回の論文です。このような形で特別賞を受賞でき、本当にうれしく思います。関係の皆様方、まことにありがとうございます。

今思い起こせば、それまで国語科の「読むこと」の領域の研究に固執していた私に「書くこと」という新境地への挑戦を示してくださった石丸憲一先生、いつも私の「変わった(?)実践」を温かく評価し激励してくださる長崎伸仁先生、「教師」としての私を鍛えてくださる深澤久先生、一年生担任の機会を与えてくださった宮本光代前校長先生。多くの憧れの先輩からさまざまな激励を頂きながら教師として少しずつ成長させていただいております。

「書くこと」で子どもたちの学習に向かう「姿勢」や「やる気」「思考力」「粘り強さ」などさまざまな面が育つことを確信しました。この学びを生かし、さらに子どもたちを「伸ばす」ことのできる教師になっていけるよう、努力していきます。このたびは本当にありがとうございました。